
新訳ヘンゼルとグレーテル

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新訳ヘンゼルとグレーテル

【Nコード】

N5027K

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

ヘンゼルとグレーテルのお話を、意外な結末にアレンジしたぜ。

深い森の中で迷ったヘンゼルとグレーテルが見つけたのは、おかしなお菓子の家だった。

ちよつとだけ家を食べてしまった時、家の中からおばあさんが出てきた。

「あ、すみません。お家を食べてしまった。」と、グレーテル。

「いいのよ。またロフトで買ってくればいいだけだし。そんなことより二人とも、森の中でどうしたの。」

「道に迷ってしまって。」と、ヘンゼル。

辺りはもうすっかり日が暮れてしまっていた。

「今日はもう遅いから、家で休んでお行き。」

「ありがとうございます。助かります。」と、グレーテル。

こんな深い森で人と会うのなんて久しぶりだと魔女のおばあさんは思った。

家中。

三人で夕食を食べる。

「おなかが空いただろう。たあんとお食べ。」

ヘンゼルとグレーテルは「いただきます！」と笑顔で言った。

そして夢中になってごちそうを食べている。

するとグレーテルが涙をぼろぼろこぼし始めた。

「私にも、こんな優しいおばあちゃんがいたらいいのに。」

「グレーテル、泣くなよ。俺まで悲しくなるだろ。」

「一体何があったんだい。」

魔女は二人から、生活が苦しいため母に捨てられて、ここに流れ着いたという悲しい身の上を聞いた。

魔女は二人を食べようと思っていたが、もう少し先延ばしにしよう

と決めた。

魔女のおばあさんも身の上を話し始めた。

「私の母は、魔女狩りで殺されてしまったよ。兄さんも私を庇って死んでしまったよ。だから二人みたいな兄妹を見ると、他人とは思えないよ。」

「だからこんなに親切にしてくださいさるんですね。」と、グレーテル。魔女は、久しぶりのお客にすっかり心を許していた。

魔女とヘンゼルとグレーテルは仲良くなって、同居生活を始めた。

同居してからしばらくたった昼下がりに魔女のおばあさんが森で散歩していると、仲のいいからすに出会った。

「おや魔女さんや。すっかり若くなつたやんけ。どないしたん。」

「それがね、私の家に可愛い兄妹が住みついて、毎日楽しいのよ。」
「そういえば、この森の近くの家で、子供を捨てたのを悲しんで、自殺しそうな男がいたで。」

「その話、詳しく聞かせてもらえない？」
「からすの話を聞いたところ、ヘンゼルとグレーテルから聞いた話にぴったり一致した。」

魔女は慌てて男の所へ向かった。

男は部屋に閉じこもり、狂つたように子供の名前を叫んでいる。

母親らしい持ち物がきれいさっぱり無くなっているので、母親はあきれ出て行ったようだ。

魔女は、しばらく使っていなかったのを忘れかけた魔法を思い出して、男が自殺しないように魔法をかけた。

お菓子の家への帰路に着きながら、魔女はこれからどうしようか考えた。

お父さんもお菓子の家に連れてきて、一緒に暮らそうか。

しかし、世間には魔女への偏見があるからそれは難しい。
ヘンゼルとグレーテルをお父さんの元へ連れていくだけでは貧しい
ままだ。

それなら宝石など高く売れるものを持たせて帰らせればいい。

お菓子の家に着くと、ヘンゼルとグレーテルが元気に「おかえり！」
と言ってくれた。

魔女は、父親の状況を二人に話そうかと思ったが、それでは父親の
メンツが丸つぶれなので、別の方向からやってみることにした。

「二人はお家に帰りたいかい？」

二人は顔を見合わせて、考えた。

「家に帰ったって、いいことないもん。僕たち、ずっとここにおいて
おばあちゃんと暮らしていきたい。」

魔女もそうしたいのは山々なのだが、この子たちにはお家に帰って、
お父さんを元気づけて欲しかった。

二人といると、孫が出来たようで嬉しい。

だが、本当の親の元に帰らせなくては。

「私は魔女で、あなたたちを食べるために養ってたんだ！さあ
大人しく死にな！」

魔女は泣きながら言った。

「嘘だ！あんなに優しくかったのに！」とヘンゼル。

「死にたくなけりゃ、とつとと出てお行き！」

ヘンゼルとグレーテルは、おばあさんが本気で出て行ってしいと言
っているわけではないと分かっていたが、騙されたふりをした。

ヘンゼルとグレーテルはお菓子の家を飛び出して、当ても無く森を
さまよっていると。

白鳥に出会った。

白鳥はヘンゼルとグレーテルに宝物を渡し、二人のお家まで導いた。

ヘンゼルとグレーテルが家から飛び出した後。

魔女からの魔法の手紙が白鳥の元に送られてきた。

魔法だから手紙は素早く白鳥の所に着いた。

そして手紙の内容を読んだ白鳥が、魔女に協力してくれたのだ。

口の軽い白鳥だったので、ヘンゼルとグレーテルに自慢げにネタばらしをしてしまった。

ヘンゼルとグレーテルは本当のことを知って、俯いた。

家に着くと、自分子供の声を聞きつけたお父さんがすっ飛んできて、二人を抱きしめた。

「ごめんな。俺がダメ人間なばかりに。」

「元気出してお父さん。」とグレーテル。

ヘンゼルとグレーテルは宝物を売って、金持ちになった。

その元手を使ってヘンゼルとグレーテルは政治家になった。

そして魔女への偏見を取り除く運動を続けた。

その甲斐あって、魔女も幸せに暮らせる社会になった。

ヘンゼルとグレーテルは再びお菓子の家を訪ねた。

おばあさんは突然の来客に驚いた。

「おばあさん。あの時は本当にありがとうございます。ぜひお礼をさせてください。」とグレーテル。

「お礼だなんて……。私がしたいくらい。」

「あの・・・私たちと一緒に暮らしませんか。」とヘンゼル。

「私がいたら邪魔でしょう。」

「あなたでないとだめなんです。お父さんも賛成しています。お願いします。」とヘンゼル。

魔女はうなずいた。

ヘンゼルとグレーテルと魔女とお父さんは、いつまでも幸せに暮ら
しましたとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5027k/>

新訳ヘンゼルとグレーテル

2010年12月14日20時26分発行